

実施年度	: 2023 (2024 入試) 年度
試験日	: 2023 年 11 月 11 日
入試種別	: 外国人留学生 大学院 (修士課程) 入学試験問題
学部・研究科	: 文学研究科 仏教学専攻
科目名	: 専門科目

① 四諦八正(聖)道: 釈尊が成道後、最初に説いた教法の内容である。四諦とは、苦(四苦八苦)に関する真理、集(原因、すなわち渴愛)に関する真理、滅(涅槃)に関する真理、道(実践道)に関する真理をいい、八正道とは正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の実践道をいう。この八正道の「正」の字は「不苦不楽の中道」を意味していることが重要である。「聖」であれば聖者歩むべき道を意味する。鹿野苑で苦行仲間であった五人の比丘に対して説かれた。

② 涅槃寂静: 三法印や四法印という、他宗教の教えとの違いを示す、仏教の教えの特徴の一つである。涅槃寂静の意味は、涅槃は寂静なりと、涅槃こそが最高の境地で、永遠の静寂、究極の安穩の世界であると、理想として求めるべきあり方を示している。涅槃とは覚りの世界であり、煩惱の火が完全に吹き消された状態をいう。寂静とは平和を教えるものでもある。

③ 一切衆生悉有仏性: 大乘の「涅槃経」において説かれた真実。生きとし生ける者は仏の覚りのうちに包摂された存在であり、すべてが仏となる可能性を有しているということ。仏性とは **buddha-dhātu**, あるいは **buddha-gotra** である。dhātu とは仏を構成する要素であり、また本質的な因でもある。ただし煩惱が仏性を覆い隠しているために、直接的に顕わになっているわけではない。信無き者にどのように信が生じるのかが果報がどのように顕わにされるのか、その修行道論が問われることとなる。その具体例として阿闍世が釈尊の慈悲の光りに包まれて救われることが説かれた。また如来蔵 **tathāgata-garbha** の言葉によって、衆生が如来の胎児であると譬喩的に示すことによって、一切衆生が必ず仏と成ることが説かれた。

【問題 2】 次の仏教者の中から一つを選び、論述しなさい。

① 龍樹: インドの言語では「ナーガールジュナ」と言う。南インドのバラモン階級の出身である。主著に『中論』があり、般若経で説かれた空性の思想と縁起の思想と結び

付けることによって、大乘仏教の教学の基盤を確立した人物である。また『十住毘婆沙論』の「易行品」を著したことで浄土教の祖師ともされ、また日本では八宗の祖と讃えられた。

② 真諦：インド出身の訳経僧であり、鳩摩羅什、玄奘、不空とともに、中国では時代を開拓した四大翻訳家として讃えられた。主な翻訳に『摂大乘論』をはじめとした瑜伽行唯識学派の根本典籍を伝えた。

③ 智顛：智顛は中国・天台宗の開祖である。彼には天台三大部と称される著述、すなわち『法華文句』十卷、『法華玄義』十卷、そして『摩訶止観』十卷がある。そのうち、『摩訶止観』によれば、法華経を大乘の究極の教えとして位置付け、仏教の真理観を明かしつつ、速やかに煩惱を断捨する修行道を体系的に打ち立て、天台教学を大成した。

【問題3】 次の仏典の中から一つを選び、論述しなさい。

①『仏説阿弥陀経』：インドの経典名を「スカーヴァティー・ヴェーハ」（安楽あるところの莊嚴）という、代表的大乗経典である。日本では、法然により「浄土三部経」として、阿弥陀仏の浄土を説く根本経典の一つに数えられた。漢訳は鳩摩羅什によって翻訳された。異訳には玄奘訳がある。同経では、心身の苦や悪の無い世界、「極楽」と呼ば

れる、阿弥陀仏が建立した世界として説かれる。また阿弥陀仏の名称が、「光明無量」や「寿命無量」という特徴に由来することが示される。

②『仏所行讃』：インド名を「ブツダチャリタ」といい、釈尊の誕生から涅槃に至るまで、仏陀の事績、所行をもとにその生涯を描き、仏陀を讃えた仏伝文学であり、美文体（カーヴィヤ）で説かれた仏教叙事詩である。著者はクシャーナ朝で活躍した馬鳴（アシュヴァゴーシャ）とされる。

③『阿毘達磨俱舍論』：略称は『俱舍論』という。経律論の三蔵中の論蔵に収められる。「阿毘達磨」とは、仏陀が説かれた「法（ダルマ）」に対して、仏弟子たちが研究し、仏陀が何を、どのような意味で説いたのかをあきらかにした典籍の総称である。『俱舍論』は、四、五世紀頃、西北インドにおいて、世親（ヴァスバンドゥ）により、説一切有部に伝わる「阿毘達磨（アビダルマ）」の教義が整理され、注釈が付された解説書である。アビダルマ文献を代表するテキストである。